傘寿を前にして

熊坂　泰忠（学芸・昭和 38 年卒）

小豆島高校で三十四年。土庄高校で四年。小豆島の高校二校のみの勤務で三十八年の教員生活を終えた後、五年間、小豆島町立図書館に勤務した。この図書館時代に始めた講座を二つ、現在も続けている。古文と漢文の講座であるが、受講者はほとんど私より年長者で、皆さん熱心に雑談半分の私の話を根気よく聞いて戴いている。

古文の講座は、『枕草子』から始めて、『伊勢物語』『竹取物語』『更級日記』『紫式部日記』と読み進み、現在、『源氏物語』を読み始めたところである。

講座の受講者が女性ばかりであったので、男性のためにもとの要請もあり、『論語』を読み始め、この五月に『論語』全文を読み終えたところである。これから新たに『孟子』講読に進むところである。

二つの講座とも、私が講師を務めている関係上からか、受講者はほとんど重なっており、和気藹々、気楽な学習会という感じで続けている。

図書館勤めを終えてからも、講座の資料作りなどで、頻繁に図書館通いをしていることから、他の各種の会の文書や書類の受け渡しなどにも図書館経由が常態になってしまい恐縮してもいる。

学生時代に始めた詩作を現在も続けているが、五十年来参加していた同人会は退会して、今は香川県詩人協会への参加のみにしている。もともと寡作なところ、これもいつまで続くものやら。島にもかつては詩人仲間も数人いたのだが、すでに故人になったりして、今は仲間もいなくなってしまった。

小豆島出身の文学者は壷井栄さんだけではないのだが、壷井繁治さん、黒島伝治さんはその作品の内容、傾向からかなんとなく疎外されてしまっている。私は年に一回だけではあるが、島の高校生に小豆島の文学について講話をする機会を戴いている。壷井栄さんのことは勿論であるが、繁治さん、伝治さんについても必ず触れることにしている。

私は小豆島を離れて生活したのは、学生時代四年間だけ。卒業した小学校、中学校、高校は全て統合されてしまった。どんなに小さくなっても自分の母校には愛着があるもので、十年前、小学校の統合に際して、閉校記念誌の編集に参画した。その数年前には、郷土の村の記録として『村史』の編纂のお手伝いをした。小さな村にとって、社会の変革の波は大小にかかわらず、直接的にかぶさってくる。その波が通り過ぎた後、何が残り、何が失われたか、誰かが、どこかの時点で検証することもあるいは必要なことかと思っている。